＜＜東北魂＞＞を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有
〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

無料
第140号
毎月発行
発行 2024 年（令和 6 年）1 月 16 日　火曜日
2024年（令和6年）1月16日　火曜日

【当新聞発行責任者兼編集長兼記者紹介】

【砂越　豊】
宮城県生まれ、70 歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3 作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナ禍を乗り越えて 4 作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。

新年号特集①　「東北再興」の実現は可能か

東北はとても不思議な「まつろわぬ場所」
全国のどこより「東北地方は一丸」なのはなぜ

年初に「東北再興」についてあらためて考える

当新聞の名称にも掲げている「東北再興」、その「東北再興」の実現性について、もしだれかに正直な感想を聞かせてもらうとしたら、「東北人」でさえも、「東北が再興すること」などは絵空事にすぎないと答えるだろう。それどころか、第一、何を再興するのかと反撃されるだろう。

また、そうした再興を夢見るだけならいいが、いい年齢した大人が真面目に語ることではないと言われる可能性が高いだろう。

ましてや、東北以外の人たちに聞いたら一笑に付されるにちがいない。

しかし、そうした見方に対して、新年にあたり、異なったアングルから筆者の考えをあらためて述べてみたいと突如考えた次第である。

当新聞名称変更の理由

この新聞の名称は最初は「東北復興」であった。

当新聞の発刊当初は、東日本大震災からまだそんなに経っていない時期であり、東北被災地の復興を間接的に支援し、呼びかけていくという当新聞の目的は自然だったので、その名称も自然に決まった。

しかし、発刊から百号になったとき、つまり、東日本大震災発生から約十年近く経過して、国中から「東北被災地復興応援」の声が聞こえなくなっていた。

被災地が完全に復興した訳ではけっしてないのに、被災地当地以外では忘れ去られたのだ。

当時、被災地以外の国中の人々が、「東北被災地復興」のフェーズはとっくに過ぎていると考えているのではないかと推察された。

そこで、筆者は、新聞の名称を変更しようと考えるに至った。

そうしたところに、いつまでも「東北被災地復興」を掲げていては、発信者と読者の間に、複雑で面倒な「ねじれ」の関係が起きるだろうと考えたのだ。

そうなると、当新聞の基盤がぐらついていくのではないかとも考えた。

「東北復興」に代わる名前を探し続けた

では、「東北復興」に代わる名前はどうしようかと悩んだ。

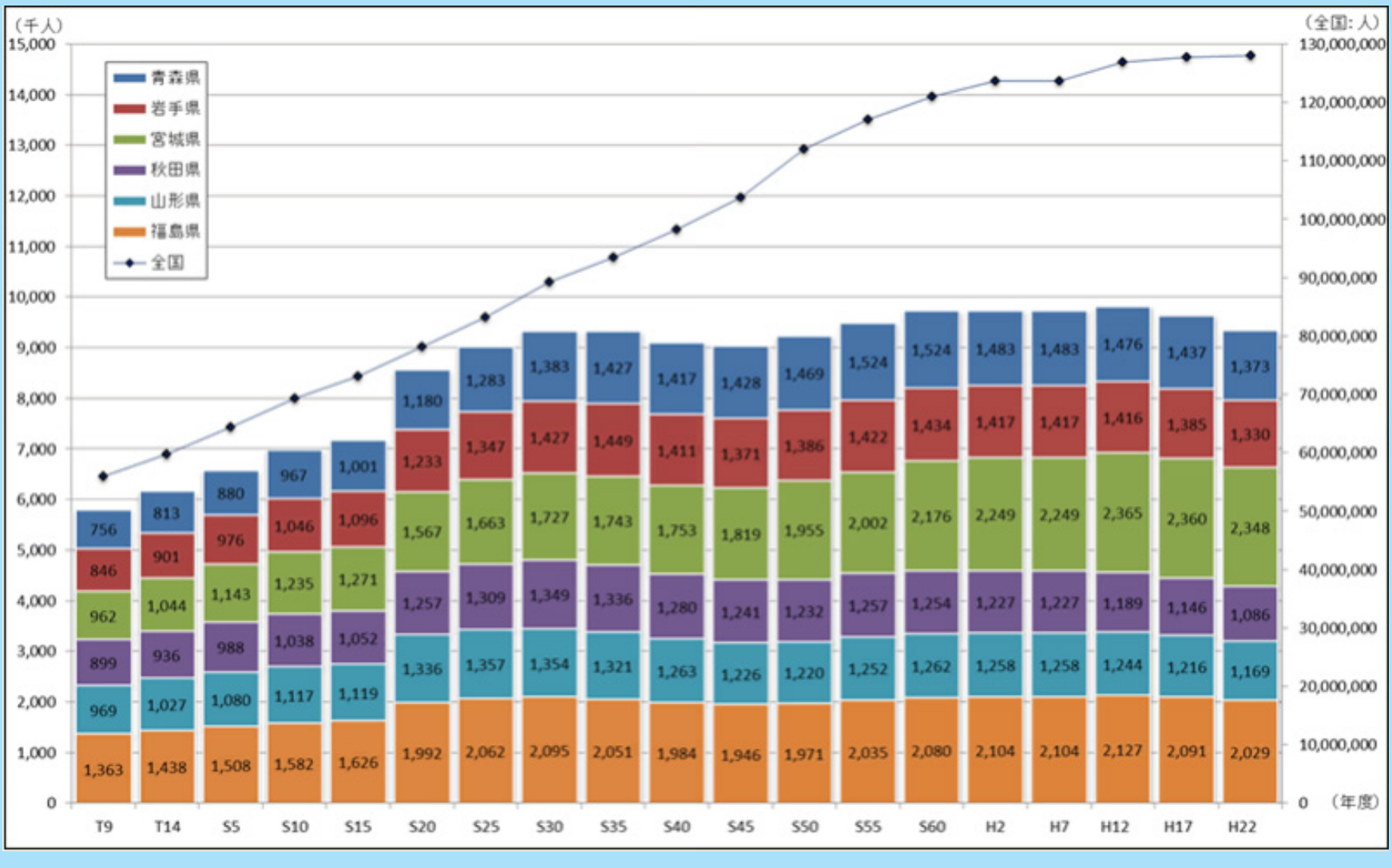
最終的にひねり出したのが「東北再興」だったが、そこに行きつくには紆余曲折があった。

新聞刊行を続けながら、「大震災」から「復興回復」するだけでは足りないとずっと考えていた。

大震災発生のはるか以前から、東北は長い時間をかけて、ダラダラと落ち込み続けていた。

経済も、文化も、地域社会も減退し続け、人口減少もダラダラと続いていた。

それは、数十年どころか、統計がなかった時代を含めれば、数百年以上の長きにわたっての減退であったと推測される。



「大正9 年から平成22 にかけての人口の推移。全国の人口は増加傾向で、大正9 年から倍増しているが、東北6 県の人口は昭和25 年から900 万人台で推移し続けている。実質的な人口流出である」・・東北沿岸域環境情報センターより

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。 Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

とすれば、やはり、大震災発生直後にはふさわしいと思った「復興」も、大震災発生後、約十年経過して、生活に直結するインフラだけは何とか回復した時点では、目標としてはふさわしくないのではないか？

つまり、大震災前に「復興」するのでは、落ち込み続けていた東北の長い下降線の途中通過点あたりに復帰するということではないか？

そう考えたから、「復興」を新聞名に入れるのは止めようとあらためて思い直したのだ。

ではどうしたらいいか？また大震災後、新しい東北に生まれ変わらなければならないと言い続けてきた。

そのコンセプトを単純に延長して考えたら、「新東北の創造」ということになる。

ならば「新東北創造」が新聞名？やはり、これもおかしい。

何がおかしいかといえば、いま存在する東北を否定したところに、まったく新しい東北を創造するのが目的ではないからである。

新たな場所に移動するわけではないし、文化も歴史も引き継ぐ。それなのに「新東北創造」とは、単なる言葉遊びにすぎないと考えた。

数百年前までには東北再興モデルはない

「再興」の意味を辞書で調べると、「衰えたり、滅びたりしていたものが、ふたたび興ること。また、それを興すこと。」とある。

では、東北の歴史を遡っていったら、目指すべき東北再興のモデルはあるだろうか？また、理想の東北はあっただろうか？

それを探しあてるのはなかなかむずかしかった。百年、二百年くらい遡っても見つからなかった。

いやあるとも、ないとも言えないようなところが東北なのかもしれないとも思った。

東北の歴史を遡ると「被支配」と「反抗」の連続

明治維新まで東北は「奥羽」と呼ばれていたが、維新のとき、幕府側について、「奥羽列藩同盟」を形成して、「新政府軍」に反抗して、戊辰戦争に参加し、敗れた。

その敗戦で、明治以降は、新政府から何かといじめられてきた。それはいまも続いている。

「白河以北一山百文」という言葉がある。

「（福島の）白河の関所より北の土地は、一山で百文にしかならない荒れ地ばかり」という侮蔑表現であり、戊辰戦争以来、新政府軍の薩長土肥側が東北地方を卑下して用いた言葉である。

時代を遡って、江戸時代からは幕藩体制に組み込まれていた。幕府の支配体制は揺るがず、支配されたままだった。

しかし、江戸時代のはるか以前には「東北が独立」していた時代があった。

それは、エミシの英雄であるアテルイやモレの時代であり、いまから千二百年も前のことだった。

しかし、三十八年もの長い戦争の果てに、アテルイらの降伏で中央集権に完全に組み入れられた。つまり「独立」を失った。

しかし、その後も時の権力に「反抗」することがたびたび起きた。

まず、アテルイの降伏から約二百五十年経ってから、東北の豪族であった安倍一族が、時の権力に反抗した。

前九年の役という。戦いは十年以上続いた。

その後、後三年の役が起きて、結果として、東北を治めたのが、「奥州藤原氏」。今から千年ほど前のことで、この「奥州藤原氏」の時代は約百年続いた。

「奥州藤原氏」の時代、東北は「独立」したとはいえず、「半独立」していた時代。

しかし、その「奥州藤原氏」も源頼朝に攻められ陥落。

その後は、鎌倉御家人が地頭として入ってきて、東北の覇権を争った時代がずっと長く続いた。

時代はずっと新しくなり、伊達政宗の登場となる。

伊達政宗は秘かに天下取りを狙っていた。

しかし、徳川家康に一歩先を越されて、江戸幕府が作られ、伊達政宗の野望はついに消滅した。

東北は反抗を呼ぶ不思議な場所？

長々と東北の歴史の一部を遡ってみたが、そこから導かれることがある。

東北という場所は、中央から適度に離れているからか、時の権力に「反抗する勢力」を産み出す場所である。

それは民族性ではなく、東北という土地がそうさせるのではないか？

いまではすっかり忘れられた「反抗心」、いや「独立心」、「権力におもねらない」とも呼ぶべきマインドが醸成される土地。それが東北ではないか？

かつて、アテルイやモレらのエミシを「まつろわぬ民」と呼んだ。「服わぬ」とか「順わぬ」とも表現する。意味は、「帰順しない」、「従わない」、であり、平定事業において抵抗を続けるなどの意味である。

結局、アテルイやモレに限らず、自ら戦いは仕掛けないが、攻められれば「反抗」する土地柄なのではないか？

他地域に住む日本人から見ると「東北はひとつ」

最近よく見かける「東北はひとつ」という意味についても、こうした「一致団結して反抗する」という意味が東北人から滲みだしているから、他地域に住む日本人から見ると「東北はひとつ」とみられるのではないかと思うようになった。

明治維新以降の廃藩置県においても、わざと仲の悪い藩同士を、同じ県に組み入れて、県としてまとまらないようにしたが、それも無駄だったのかもしれない。

ほかにも、ありとあらゆる分断作戦にもかかわらず、「東北はひとつ」のようだ。

東北には埋もれたままの歴史がある

東北には非常に長い歴史がある。

しかも、反抗しつつも負ける側だったから、消された歴史や埋もれたままの歴史もある。でも、東北はそれを誇りにすべきだ。

何せ、東北は縄文土器が発見された場所でもある。

今から一万六千年前のことである。そんな長い歴史がある地域はそうはない。

このように考えれば考えるほど、東北という地域は不思議な地域である。

真空地帯のように何もかも飲み込んでいくような場所なのかもしれない。

結局、なぜ「東北再興」だったのか

以上のような地点にたどり着き、「時の権力におもねらない東北を取り戻すということ、とはいえ、攻めたりはしないが、攻められたら反抗する、そうした気概をもった東北を「再興」しよう」ということを込めた新聞名として「東北再興」とするに至ったのである。

647	越国に淳足柵をおく
648	越国に磐舟柵をおく
658	阿倍比羅夫の軍，日本海を北上
659	阿倍比羅夫，蝦夷を征討
660	阿倍比羅夫，粛慎を征討
698	越後・陸奥国の蝦夷，方物を献上
708	越後国に出羽郡を設置
709	陸奥・越後国の蝦夷征討のため軍を派遣
712	越後国出羽郡を割いて出羽国を設置する
720	陸奥国の蝦夷反乱，按察使上毛野広人を殺害
724（神亀元）	大野東人，多賀城を築造（伝）。3 陸奥国府，鎮守府を設置。持節大将軍藤原宇合，蝦夷を征討
733	出羽柵を秋田に移転（秋田城）4
759	陸奥国に桃生城，出羽に雄勝城を築造
767	陸奥国に伊治城を築造
774	陸奥国の蝦夷，桃生城に侵攻
780（宝亀11）	陸奥国覚鱉城を築城。伊治呰麻呂，按察使紀広純らを殺害し反乱。多賀城焼亡
789	征東大使紀古佐美軍，蝦夷の首領阿弖流為の軍に大敗
797	坂上田村麻呂，征夷大将軍に就任
801	坂上田村麻呂，蝦夷を征討
802（延暦8）	坂上田村麻呂，胆沢城を築造（鎮守府，多賀城から胆沢城に移転）5 。蝦夷の首領阿弖流為が降伏
803	坂上田村麻呂，志波城を築造 6
805	徳政論争により，桓武天皇が蝦夷征討を中止
811	文室綿麻呂，征夷将軍に就任し蝦夷を平定
878	出羽国の夷俘が反乱。秋田城などが焼亡（元慶の乱）

かつて、東北に住む人々が蝦夷といわれていた時代の蝦夷関係年表・・・独立が失われていく年表でもある・・・『詳説日本史図録』（山川出版社）より

東北が独立していた時代から、征服されていく経緯が示されている・・・東北地方の城柵（じょうさく）『詳説日本史図録』（山川出版社）より

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

新年号特集②　今年の東北の動向を予想する

スポーツをはじめ「躍動する東北」を期待したい

東北全体の昨年一年の活動を振り返り、今年の展望を予想するという、ボランティア小新聞には似つかわしくない大それた企画のこの記事である。

しかし、新年ということで、身の丈を越えた企画を何とかお許しいただければと思う。

＊

東北全体の動きを構成するたくさんの分野があるなかでも、東北人の多くが共通して関心のある東北のスポーツ分野から開始しようと思う。

とはいえ、東北のスポーツ分野に限らず、当記事が取り上げるすべての分野においては、「筆者の独断と偏見」とで勝手に選んだ昨年の出来事と今年の予想と願望であることを最初にお断りしておく。

【東北のスポーツ分野】

昨年の東北のスポーツ

昨年の東北のスポーツ分野のニュースのなかで、国内外で話題となったニュースといえば、エンゼルスの大谷翔平選手の大活躍がほぼ独占したといってよいほどだった。

記憶に新しいところでは、日本人初のＭＬＢのホームラン王、二度目のＭＶＰだが、その他にも記録ずくめの大活躍であった。

さらに、どうなるか心配だった移籍問題も、年末にドジャースに移籍することも決まった。

これで、とりあえず一安心である。

大谷選手の活躍以外では、惜しかったのは、高校野球夏の甲子園で、仙台育英が準優勝に終わったこと。

筆者はいまだに、あの慶應の応援の様子には納得がいかないままである。

とはいえ、二年連続で決勝戦まで進んだことは大変な活躍であることは言うまでもない。

今年はぜひ、昨年の「借り」を、完膚なきまでに返して欲しいと願っている。

今年の東北のスポーツ

では、昨年の東北のスポーツ分野から転じて、今年はどうだろう。

幕開けは全国高校サッカー選手権 青森山田が2大会ぶり4回目の優勝

年明けの八日に行われた全国高校サッカー選手権決勝で、青森山田校が滋賀の近江高校に「3－1」で見事に勝利をおさめ優勝した。

筆者はテレビ観戦していたが、青森山田校は試合を通じてとにかく強かった。

試合後のネットでは、あまりにも強すぎるとの声もあったが、強いことは悪いことではない。

プロ選手のようなテクニック、粘り強いプレー、どれをとっても、超高校級で素晴らしかった。

幸先よく、東北のスポーツ分野における活躍の先陣を切った形となった。まことに喜ばしい。

都道府県対抗女子駅伝で29年ぶりの優勝

次いで、この記事を執筆開始寸前に見た全国都道府県対抗女子駅伝であるが、二十九年ぶりに宮城県が優勝した。まことにおめでたい。記事締め切りにも間に合ってよかった。

最終区間での逆転勝利であったが、二番手に抜かれはしまいかと最後まで手に汗握る展開だった。

全国高校女子駅伝では、仙台育英高校女子チームが、ゴールテープ寸前で追い抜かれるという「悲劇」が起きたが、その追い抜かれた本人が「悲劇」を克服して、その都道府県対抗女子駅伝に出場して活躍した。

見事に借りを返した形であったが、なおさらにめでたい。

今年の大谷翔平選手の活躍はどう展開するのか想像するだけで震える

昨年はホームラン王にＭＶＰと大活躍で、しかも、エンゼルスからドジャースへの移籍も発表した大谷翔平選手。

今年の活躍はどういうことになるのであろうか？

大谷選手といえば、野球の試合だけでなく、日本の小学校にグローブ六万個をプレゼントしたり、能登半島大地震への支援も発表して注目を浴びた。

そうした活動もあったうえで、今年のますますの活躍が期待されている。

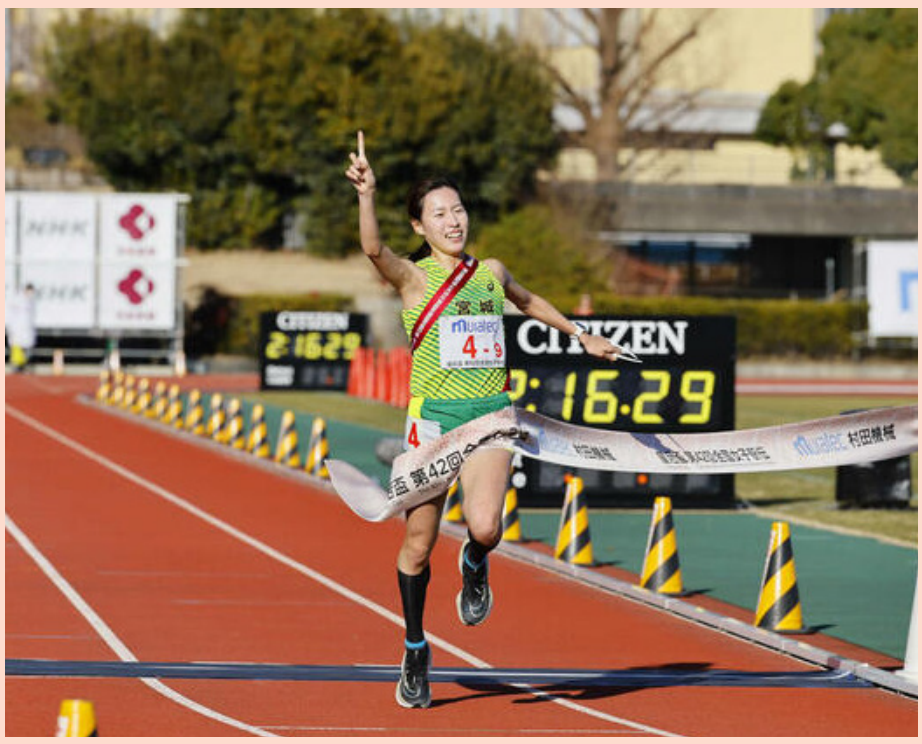
移籍したドジャースであるが、メジャーリーグの投手としては歴代最高総額となる十二年総額三億二千五百万ドル（約四百七十億円）で契約を結んだ山本由伸投手のドジャース加入にあたっても大谷選手は入団早々貢献している。

これで二刀流の大谷選手と日本最高の投手の山本選手を従えての無敵のドジャースの布陣というより一層力強い舞台が整ったのだ。

さらに、今年の打撃に関しては、ドジャースが、大谷選手の打順の前後に強打者を配置すれば、昨シーズンのような「敬遠」も少なくなるであろうし、どんな打撃成績を残すのか今からとても楽しみである。

そして何よりも、大谷選手のいる無敵のドジャース

全国高校サッカー選手権 青森山田が２大会ぶり４回目の優勝・・・NHK より



全国都道府県対抗女子駅伝宮城優勝・・・日刊スポーツより

大谷選手が日本の小学校に６万個のグローブプレゼント・・・ニュースリリースより

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

の試合が見たい。

筆者だけでなく、国内外の野球ファンは目が離せないのは確実だ。

アメリカではフットボールとバスケットボールが人気スポーツで、野球はいまひとつということだが、それが逆転する可能性もあるのではないかと秘かに思っている。

【東北の工業分野】

昨年十一月に、待ちに待った東北の新たな先端半導体製造工場建設が発表された。

すでに熊本、札幌ときて、もう東北には来ないのかとあきらめかけていたところの朗報だった。

それは、日本のSBIホールディングスと台湾の力晶積成電子製造（PSMC）が、半導体工場の建設地に宮城県大衡村の「第二仙台北部中核工業団地」を選定したと発表したニュースである。

第一期工事には約四千二百億円を投じ、二〇二七年の量産を目指すという。今年の後半にも着工したいということだった。追加工事もあり、工場の規模も相当なものである。

これを契機にして、半導体の生産だけでなく、半導体研究には歴史の深い東北大学を中心にした一大研究開発基地も作って、生産と開発の東北拠点を設置して、ぜひ東北経済に貢献して欲しいものだ。

宮城県、そして東北大学は故西澤潤一というミスター半導体の生地であり、学び舎であり、彼が先端半導体の開発で世界的に有名になった場所でもある。

当時、世界の先端半導体企業が、故西澤氏の研究室に入れ替わりで、行列を作って日参したというほどの人物であった。

その東北にやっと先端半導体生産の拠点ができるのである。非常に感慨深く、意義深いものがある。

世界からは注目されはしたが、生前は何かと日本の経済界からは冷遇されていた故西澤氏も、草葉の陰から喜んでいるだろう。

こうした東北の先人のアグレッシブな業績は引き継いでいくべきであると思う。

【東北の米産業分野】

年明けに経済関係新聞を見ていたら、「先を越されてしまった」とがっかりした記事を見つけた。

「柿の種」で有名な新潟県の製菓会社の亀田製菓に関する記事である。

この会社の会長兼最高経営責任者はインド出身である。

その彼が打ち出した戦略が、外国籍社員を三倍に増やし、世界展開に大きく舵を切るということだった。

その具体的な戦略が、「小麦粉を使わないグルテンフリー市場が拡大する中、食感が特徴的な米菓は海外でも喜ばれるという「気づき」が推進力となった。」というのだ。

さらにこう続く。「日本は自分たちのポテンシャルを一番分かっていない」、「日本にはものづくりの技術がある。必要なのはイノベーション、変化です」と。

こうした姿勢は東北でもすぐに取り込むべきである。

よそが完全な商品を作り出して、市場が評価してからでは遅いのだ。

いまならまだ間に合う。「柿の種」に負けない「米菓」、いやもっと進めて「グルテンフリーな米粉料理」や「グルテンフリー米粉食品」を開発して、国内外に販売して欲しい。

以前から何度も言っているように、東北は国内最大の米どころなのである。その絶対的なアドバンテージを活かさず、よそに先行されるのはなんとも情けないではないか。

したがって、今年こそ、東北全体で「米粉」に注力して欲しいものだ。

【東北の水産業分野】

昨年は、福島第一原発の「処理水」の海への放出に反発して、中国が、日本の海産物の禁輸に踏み切った。

代表的な水産物はホタテであるが、ナマコもあるし、それ以外にもある。

特にホタテに関しては、輸出の大半が中国であり、しかも、そのホタテを中国で殻むきをしてアメリカに輸出しているというのだ。

日本からは冷凍した殻付きホタテを輸出している。

筆者はホタテの殻むきがどれほどむずかしい作業なのかどうかは分からない。

しかし、北海道や東北の生産地でそれが出来ないというのは理解できない。

みすみす、殻むき加工の「付加価値」を他国に横取りされるのを指をくわえてみているという、そもそもの姿勢は修正して欲しいと願う。

したがって、中国のホタテ禁輸は「付加価値」を稼ぐ絶好のチャンスととらえるべきだろうと思う。

そうした工夫ができないのであれば、東北水産業の未来は暗い。

それから、ナマコが大好きな筆者にとっては、これまでほとんどが輸出に回されて、国内消費者には入手できなかったナマコが食べられることは大歓迎である。

高級品で簡単には入手できないナマコのイメージをこのまま放置しておけば、国内市場からも締め出されることになることに十二分に留意すべきである。

【躍動する東北を期待】

以上見てきたように、今年の東北は明るい兆しがたくさんあると思う。

特に東北のスポーツに引っ張られて、東北に元気が出てくるように感じる。

大谷選手ひとりの貢献とは言わないが、かなり勇気づけられていることはまちがいない。

その点でも大谷選手を見習っていくべきである。

再度、言わせてもらえば、東北活性化のポイントは、アグレッシブの回復。

いつまでも受け身でいては、国内外の激しい動きから締め出されるので、ぜひとも大きく姿勢を転換して欲しいと願う。

そうすれば、他の地方に並ぶどころか、抜きん出る可能性さえあると思うのだ。

新たな先端半導体工場建設予定地・・・宮城テレビより

輸出できなくなったホタテ・・・日テレより

米粉料理・・・リビング京都より

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

改めて地震に対する備えと被災地への支援を

元日に襲った大地震

今年一月一日、一六時一〇分、石川県の能登地方を震源とするM七・六、最大震度七の大地震が発生した。気象庁によって「令和六年能登半島地震」と名付けられたこの地震、発生から一〇日以上経った今も、まだ被害の全貌は明らかになっていないが、一月一二日現在、亡くなった方が二一五名、安否が不明な方が三八名いると発表されている。

能登半島では、二〇二〇年一二月以降、群発地震が三年にわたって発生し続けていた。また、一九九三年にM六・六、二〇〇七年にM六・九の地震が発生している。昨年五月五日にもM六・五の地震が発生した。しかし、今回の地震は、それらの地震とは一線を画する極めて大きな地震だった。

今回の地震のM七・六という値は、阪神・淡路大震災を引き起こした一九九五年の兵庫県南部地震や二〇一六年の熊本地震のM七・三より格段に大きい。数字だけ見ると七・六も七・三もあまり違いがあるように見えないが、地震の規模を表すM（マグニチュード）の数値は、〇・一上がるとその規模は約一・四倍になる。すなわち、M七・六である今回の地震は、兵庫県南部地震や熊本地震の三倍近い規模の大きな地震だったわけである。

日本海側で起こった地震の中でも、一九九三年の北海道南西沖地震、一九八三年の日本海中部地震に次ぐ規模のものである。過去に日本海側で起こった地震の中でも最大級の地震であることが分かる。

それにしても、元日の一六時過ぎである。多くの方が、お正月ということで楽しい気持ちでいたに違いない。遠方にいる家族が帰省して一緒の時間を過ごしていたということも多かったはずである。そこに起きたこの大きな地震。改めて、自然災害はこちらの都合などお構いなしにやってくるものだということを実感する。

十分届いていなかった東日本大震災の教訓

今回の地震では、とにかく建物の倒壊の被害が甚大で、かつ輪島市のように大規模な火災が発生した地域もあった。そしてさらに、大きな津波が沿岸部を襲った。地震の震源が陸地に近かったために、兵庫県南部地震や熊本地震のような直下型地震のような側面もありつつ、海沿いだったために津波も引き起こしたわけである。震源が陸地に近かったために、津波の到達時間も東日本大震災の時とは比べ物にならないくらい早かったようである。津波からの避難は一刻を争うということを改めて思い知らされる。

今回の地震による津波に襲われた地域の一つである能登町の白丸地区に朝日新聞の記者が入って現地の人に話を聞いた記事があったが、そこで語られている言葉に実は私は大きな衝撃を受けた。そこでは、「ここに津波が来るなんて思ってもみなかった」、「津波をひとごととして捉えていて、危機感が地域全体で足りなかった」、そうした言葉が語られていたのである。

東日本大震災で後悔してもし切れないくらいに大きな犠牲を出してしまった津波の恐ろしさについては、発災直後から今に至るまで繰り返し報じられているし、ネット上でも様々な映像を見ることもできる。津波の恐ろしさを知った東北のさまざまな人たちが津波避難の大切さについていろいろな形で発信し続けているし、及ばずながら私も仲間たちと一緒に震災の教訓を風化させずに他の地域の人やこの地域のこれからの人に対して伝えていく取り組みを続けてきた。

にもかかわらず、東日本大震災の発災直後に東北でよく聞かれたのと全く同じような言葉を今回も聞くことになろうとは。それが何よりも残念でならない。と同時に、まだまだ伝え足りていなかったということもよく分かった。やはり、未曾有の地震災害を経験した一人として、これからも引き続き、あらゆる機会を捉えて、様々な形で東日本大震災での経験から学び取った知識や情報について発信していかなければと気持ちを新たにしたところである。

度重なる地震で耐震性が低下している可能性

石川県の一月一二日の発表によれば、今回の地震による住宅の被害は、全壊から一部破損まで含めて実に四二五四棟にも上っている。ただ、現段階ではとりわけ被害が大きかった輪島市、珠洲市、能登町でまだ正確な数が把握できておらず、今後その数は大幅に増えるものと思われる。

今回の地震ではこうした住宅の被害を含めて、建物の被害の甚大さが際立っている。その要因として、先述の二〇二〇年以降の群発地震の影響を指摘する意見がある。度重なる地震、そしてその中にはM六・七の大きなものもあったわけだが、そうした地震によって建物の耐震性が著しく低下していたのではないか、という指摘である。

ここで考えなければいけないのは、この指摘は、能登半島の人たちのことだけと考えるべきではない、ということである。東北においても、一三年前の東北地方太平洋沖地震以来、いまだにその影響と見られる地震が続いている。その中では、M七クラスの大きな地震も実に一一回を数えているのである。これらの地震によって、一三年前の地震では倒壊しなかった建物も今では相応にダメージを受けていると考えた方がよさそうである。

具体的に現状で耐震性がどれくらい保たれているのかは、耐震診断を受けてみないと分からない。ただ、その費用は耐震診断協会のサイトによると、延床面積が一二〇平方メートルほどの木造住宅で四〇から五〇万円と、決して安価ではない。多くの自治体でその費用の概ね九割程度を補助してくれる制度もあるが、ネックとなるのはその対象になるのが旧耐震基準、すなわち一九七八年の宮城県沖地震を契機に一九八一年に改正された建築基準法による基準が適用されるよりも前に建てられた住宅のみとなっているということである。

しかし、新耐震基準が適用されて一九八一年以降に建てられた住宅でも、既に建てられてから四〇年以上が経過している住宅もある。ましてや、一三年前の大地震、そしてその後の度重なる地震も経験している。九割とまではいかなくても、新耐震基準で建てられた住宅についても費用負担の補助を考えるべき時期に来ているのではないだろうか。

すぐに耐震診断、並びに耐震補強工事ができないという場合に、地震による建物の倒壊で命を落とす確率を少しでも下げるための方策としては、寝起きの場所を建物の二階部分とするということである。今回の地震で倒壊した住宅を見ても、一階部分が倒壊しても二階部分は倒壊した一階の上に乗ってそのまま残っているケースが多い。その分建物の下敷きとなる確率を下げることができるはずである。

啓開作業に当たる地元建設会社の存在

今回の地震では、被害が最も大きかった能登半島の先端部に向かう国道二四九号線が、土砂崩れや道路の損傷、路肩の崩落などで至る所で寸断され、人員の派遣や物資の輸送に大きな障害となった。今回の地震に限ったことではないが、このような場合に土砂を撤去したり路面の補修をしたりする「啓開作業」と呼ばれる作業に臨むのが地元の建設会社の人たちであることはあまり知られていない。

かの東日本大震災の時も、地元の建設会社の人たちが、自分たちも被災しながらも献身的に啓開作業に当たった。マスメディアで多く報じられるのは自衛隊員や消防隊員の動きであるが、そうした人たちが被災地に入れるように作業をしている人たちの存在も心に留めておきたいものである。

土木の最新ニュースなどを手掛ける日経コンストラクションの記者が、今回の地震で啓開作業に当たっている石川県建設業協会の真柄常任理事にインタビューした記事がネット上で読めるが、そこでは「発災日が元日でなければ、もう少し早く復旧を進められたはず」との話があった。発災が元日であったがために、復旧に必要な資材や機材を調達する会社などと連絡が取れず、重機の稼働に必要な燃料の確保も困難だったのだそうである。こうした話は、次の災害への備えを考える上で本当に参考になる。

それと、本当にその通り！と思ったのが、「報道関係者にとっては、人海戦術で活躍する自衛隊の方が見栄えは良いかもしれないが、被災した道路を初めに切り開いているのは地元建設会社だ。誰も文句を言わずに全員が頑張っている。本当に頭が下がる思いだ。その頑張りをより多くの人に知ってもらえたら、不眠不休で復旧に当たっている現場の大きな励みとなる」という言葉である。自衛隊員や消防隊員が活躍できる縁の下の力持ちとなっているのがまさに地元の建設会社の人たちなのである。

他人事じゃないという意識

本当に嬉しいと思ったこともある。この原稿を書いているのは一月一二日だが、明日一月一三日に、宮城県内のビール関係者による能登半島地震のチャリティイベントが、同時多発的に三箇所で開催されるのである。一つは仙台市内のクラフトビールバー「グッドビアマーケットエン」によるもの、一つは石巻市にあるクラフトビール醸造所「イシノマキホップワークス」によるもの、一つは女川町にあるクラフトビール醸造所「ガル屋ビア」によるものである。仙台市も石巻市も女川町も、いずれも一三年前の地震で甚大な被害を受けた地域である。

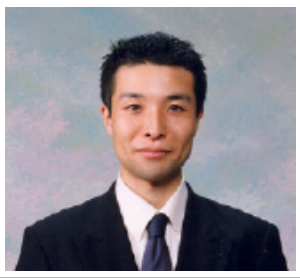
一月一日に地震が発生し、その翌週の週末にはそうしたチャリティイベントを企画して実施するというその迅速さ、そこには一三年前に嫌というほど経験して地震災害が決して他人事ではないという意識と、そしてその一三年前に受けたたくさんの支援の恩返しという意識があったに違いない。同じ日に三つも重なったというのは、お互いに連絡したり調整したりすることなく、とにかく一刻でも早く、まずは自分たちでできることをやろうという気持ちで始めた、ということを如実に物語っているように思う。

これら三つのチャリティイベントとも、その日販売したビールの売上金全額を義援金として被災地に送金することを表明している。その心意気やあっぱれである。私も及ばずながらできるだけ多く協力したいと思っているところである。こうしたことも含めて、一三年前に同じように大きな地震災害を体験した我々だからこそ行えることが、これからもきっとたくさんあるに違いない。

東北に住む我々としては、今回の地震を決して他人事と思わずに、自らの地震に対する備えを振り返って必要と思われる対策を講じると共に、決して他人事と思わずに、今回被災した能登半島の方々への支援もできることから始め、決して一過性に終わらせずに長く続けていければと思う。

執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

やはりそこは「大東北」なのか―総北方民族、未来を照らす狼煙の事

二〇二二年一〇月、二人の若い「シベリア人」男性が、ロシア極東部海岸（つまり、シベリア）から小型ボートにて船出し、暴風・荒波で知られる危険海域ベーリング海峡を乗り越えて遥かなる対岸・アラスカへと渡航を果たした。

これはシベリア先住民による大国ロシアからの「亡命」と言えるものだった（政治家や王族ではない場合、亡命ではなく難民であるという意見もあるが）。

彼らは何故、世界一危険な海原に漕ぎ出してまで国を後に逃亡したのか？それは、彼らシベリアの人々がロシア政府によってかのウクライナ戦線に兵士として送り込まれる、という過酷な状況が背景にあったからである―つまり、行きたくもない戦争に行き、殺したくもない人々を殺すくらいならば、新天地到達への僅かな可能性に賭けて荒海に飛び込んだ方がマシであるという決死の意志表明に他ならなかったのである。

恐るべき現実であり、ロシアという国家の非人道的な側面を思い知らされるようでもある―が、無論事は決して単純ではない。ソビエト連邦崩壊後、シベリアには広大なサハ共和国、ブリヤート共和国の他多くの自治管区が成立し、各々の民族自治権が認められ、特に共和国は憲法上の事でロシアとしばしば衝突するほどの権限を持っている為、本来であれば自国民を「他者」の諍いの死地に送り込むような事を承認するはずがなかった。だがプーチン現政権は中央集権化とロシア憲法の優位化を狙い、各共和国の自治権を大幅に削減し、ウクライナ侵攻後の一昨年には軍務経験を持つ予備役三十万人を招集する「部分的動員令」を宣言したこれは主にシベリアやコーカサス地方など貧しい地域から経済的優遇を引き換えに募集され、当初政府は反戦世論の攻撃を恐れてか彼らを前線には送らないと説明していたが、実際には強制的にウクライナへ投入されていた例が後に明らかになったのだった。

シベリア各地では徴兵に対する抗議デモや徴兵局への襲撃、徴兵を拒んだ末の自殺未遂などが後を絶たぬ一方、ロシア中央の都市生活では経済制裁の影響もさほどなく、市民は侵攻当事国という立場にもかかわらずほぼ平穏に日常生活を送り、シベリアの動向に対しては無関心な人々も多いという話も聞くのである。

以前私は「日本雛形（ひながた）論」という世に言うところのトンデモ説話―日本は世界の縮図として、世界各地の地理・国家事情が日本の各地方に対応し、日本で起こる事は世界でもやがて起こるというような国粋主義的にして誇大妄想的な理論が明治・大正期を通じて構想され広まった話を取り上げたが、その際ユーラシア大陸は日本の本州に当たり、シベリアはまさに東北地方に相当するとしながらも、私自身は東北における黄金の存在や英雄的人物を生む土地柄などを理由に東北とシベリアは必ずしも一致しないというような見解を示した。けれどもその後、何気なく目に入ってくるインターネット上の動画の中にたまたまなのかシベリアの幾つかの情報が含まれていて私は自身の見識の甘さに気づかされる事になるのであった―本稿では「日本雛形論」云々以前に驚くほど根本的な点で東北と共通するシベリアと、東北もかつて経験し、現在もそうなっていたかも知れない過酷な状況、そしてもはや文字通り他人事ではないシベリアと東北、更には両地の肩に掛かった人類全体の未来についてまで、想いを馳せてみたいと思う。

※

私がシベリアという場所を初めて特別に意識したのはその昔二十歳頃の事、怪奇小説『ドグラ・マグラ』で知られる夢野久作の中編『氷の涯』においてであったと思う。大正期ロシア内戦中の満州・ハルピンを舞台にしており、かつてシベリア王国建設を目論んでいたという白軍（反革命軍）総元締という人物が登場するこの異色の推理小説は、北満守衛の一等卒に過ぎぬ主人公の日本人青年が売国・横領・殺人・婦女誘拐などの容疑に関わる大事件に巻き込まれ、瘋癲（ふうてん）の混血少女とともに氷結した北方の海へ馬橇で滑り出ていく結末が鮮烈な印象を残す。

かつて中学時代に南米アンデス地方の少数民族に憧れていた私は、思いがけず札幌での生活を余儀なくされてから俄かに北方志向となり、南米よりよっぽど近い日本海対岸の大陸における人々の存在に関心を向けるようになった。現ロシア領であるユーラシア大陸中東部にはエヴェンキ人、ブリヤート人、ヤクート人を始め北海道近隣にはウデヘ・ナナイ・ウリチ等多彩な各民族が割拠しており、日本では特に黒澤明によって映画化された『デルス・ウザーラ』の実在のナナイ人狩猟者・デルスが有名である。この作品はデルスとの友情を分かち合ったロシア帝国の探検家アルセーニエフによる手記が元になっているが、ロシアとシベリアの関係は基本的には悪い意味での腐れ縁といっても良いもののように思える。

現在のロシアによる東方への領土拡大の引金は、中世におけるモンゴル帝国の西方への侵略の脅威にあった。チンギス・ハーンによる徹底した恐怖統治に数世紀に渡り晒されたスラヴ民族は、モンゴル衰退後に空白となった東方の広大なる地・シベリアへのほぼ反動とも言えるような大進出を始める。当初国家の東端即ち国境を定める為であった東征は、当地先住民の狩猟技術によりもたらされる高品質な毛皮の獲得へとその目的を変え、モンゴル帝国への従属からシベリアの人々を解放する救世主であるかのようにふるまいながらロシア人は巧みに彼らを従わせ新たな支配者へ成り代わっていったのである。シベリアの村々をロシア政府の息がかかったコサック部隊に襲わせ、そこに別の部隊を送り撃退を演じさせて英雄としての信奉を得るというような詐欺まがいの手法を通じて人々を洗脳し、西方ロシアの人々が領土シベリアに無関心のまま莫大な利益を享受する時代が到来、その状況は後世毛皮が価値を失ってからも人材的搾取という形で、例えば裕福なロシア人がやりたがらない職務への従事―そう、ロシア国家の兵隊として真っ先に死んでもらう駒となるような形で、残忍にも継続していると言えるのである。その犠牲は既に第二次大戦時現実のものとなっており、また現政権となってからは伝統文化や言語の弾圧、情報統制と操作という前時代の悪夢への逆戻り現象が起きているともいう。昨年十月にはロシア国営放送関係者が「シベリアのどこかで核実験を行えばいい」と発言し物議を醸したが、実際広義のシベリア域内で過去核実験が行われた記録はない（北極海の島や現カザフスタンが実験場だった）とは言え、中央の地方への無関心や無知がまるで当地が空き地同然であるかのような軽視へ繋がっている現状がここに示されているのではないだろうか。

こうして見ると、不本意ながら「日本雛形論」の説く通り、シベリアがあまりにも「東北的」である事に驚かされるのである。当理論の後の解釈の一つとして黄金・民族迫害の要素を持つ南米大陸もまた歴史的に東北に対応する地域としてユーラシア大陸の上に接着する形があったが、まさに南米とシベリア、両方合わさる事で完全に東北との照合が成るようにも思える。

しかしやはり決定的に、シベリアと東北は異なる点がある。東北の場合、西南の所謂「大和民族」に対し異民族だったのかどうかすら疑問が呈され、歴史的にも現状としても東北はもはや独自の民族ではなく、独立など現実的な話題に上る事はほとんど無い。一方のシベリアは元々が西方コーカソイドと東方モンゴロイドの明らかに諸要素を異にする同士、おそらく今後も決して大国ロシアとは融合する事がない、よって必然的に独立へ向かうべき国々であるという事だ。故に続く苦難もあろうが、実のところ東北から見れば羨ましいところもある―各々のアイデンティティを元に共和国や自治区を建設できるという事はまさに全少数民族の夢であるが、考えてみれば彼ら多くの民族が混在し成り立つシベリアはかつての縄文時代以来の東北の姿そのものであり、民族の大半がロシア正教に改宗しながら、伝統的なシャーマニズムの信仰も失っていないその様は、仏教や国家神道に染まりながらも縄文以来の巨石信仰を残し、草木供養塔など太古からの感覚を再興するかのように新たな信仰の形を生み出す東北の姿に重なるようでもある。

※

先日、英国のサイエンス・ライター、ガイア・ヴィンスによる『気候崩壊後の人類大移動』（河出書房新社）を手に取ったところ、「東京は亜熱帯化し、サハラ砂漠は欧州まで拡大、ニューヨークは水没する」世界十億人以上が居住地に困窮する時代は近いという衝撃的（いや既に多くの人々が薄々認識しているか）な内容で惹きつけられた。

もはや避けられぬ地球温暖化の進行によって、今世紀中に東アジアの大半の地域は砂漠化し、アフリカ・アメリカ両大陸もまた猛暑や度重なる森林火災と砂漠拡大で人間の居住には困難になる、と予測されているとの事。その上で本書は、「だが希望は残っている」としてシベリア、グリーンランド、そして南極に農業や鉱業に適した環境が成立し、やがて新たな都市が誕生するだろう、と説くのである。先住民たちの文化や生活を破壊し尽くすだけでは飽き足らず、他所の人類で大挙して押し寄せ埋め尽くそうとは何とも虫の良い話ではないか―とも思うが確かに火星に移住するなどというよりはよほど現実的な提案であり、全人類に問うべき選択肢としても決して非道なものではない、むしろ新天地として多くの人々にロマンを抱かせる未来である可能性すら見える。

だが―と敢えて私は、例の「日本雛形論」を持ち出して夢想的実験を試みてみたいとも思うのである。もし、シベリアにいつか世界中の人々が新天地として集まり住む事になるのならまずその実験的な「新天地」は他ならぬ東北となるのではないか、と。そしてもしこの東北が住めなくなるのだとしたら、おそらくシベリアも、世界も、地球全体がやがて住めない惑星になるのではないか、と。

だから、東北が住めなくなる事は決してあってはならない。シベリアと東北が連携を取り、世界人類を受け入れて彼らを育み続けシベリアと東北の人々が中心となって地球と世界を復興させていく―我ら総北方民族にとって、それ以上の未来へのロマンがあろうか。

私達は「大東北」へ向かうのか？『気候崩壊後の人類大移動』

奥羽越現像（おうえつげんぞう）氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始める東北好きである。

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

新年あけましておめでとうございます。
本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

白鳥飛来

雪と社殿

私の年はもう少しだ

氷点下二桁の芸術

シリーズ　遠野の自然

「遠野の小寒」

遠野 1000 景より

今年こそは静かな新年を迎えられたかと思った矢先、元旦夕刻、能登半島で巨大地震発生。大津波発生が判明したのは少し経ってからで、半島という環境のため、いまだに被害状況も定かではありません。

犠牲者の方々のご冥福をお祈りするとともに、被災者の方々に心からお見舞い申し上げます。

日本列島は、どこでも、いつでも、巨大な自然災害が発生する場所であることをあらためて肝に銘じたい。

結果、残念ながら、大災害は予測不能であり、そのため常にあらゆる状況を想定して生きて行かねばならないというのが新年の誓いとなってしまいました。

六角牛山と赤い鳥居

霧氷 2

片葉のスギ

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

写真でお伝えする
東北の風景

「トラと鹿から あけまして おめでとう」

写真撮影
尾崎匠

【東北再興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.